

chapter.1 春日部 たすく

声をかけてきたのは、水彩画に新風を吹き込み続けた、会津生まれの画家。

日本最大の水彩画公募団体の一つ、水彩連盟。その創設メンバーであり、日本の水彩画史に大きな足跡を残したのが、会津若松市出身の春日部たすく。会津中学校を卒業後すぐに上京した春日部は、活動の拠点は東京におきつつ、福島県出身の在京画家と積極的に交流を重ねていった。そんな春日部と、斎藤清が知り合ったのは、1954年頃。やはり東京に住んでいて、世界的な版画家として頭角を現していた時期である。同年の第10回会津美術展に招待作家として出品、これが会津での美術展に参加した最初となる。その時審査員を務めていたのが春日部だった。

春日部たすく 《むらに狂う蝶たち》 1979年 紙、水彩
会津若松市教育委員会蔵

きっかけは春日部たすく。斎藤清、墨画に目覚める。

水彩画に自由な表現とのびやかな感情の発露を求めた春日部は、柔軟な発想の持ち主だった。斎藤と春日部、そこに日本画家の酒井三良も交えての会合で、三人展をしようという話が持ち上がった際にも、春日部が「お互いに、本職を離れた分野で、のびのびかいた作品を発表しよう」と提案、1963年日本橋三越での作品展が実現する。「ばくたち会津の人間は、ボクネンジンだから」ということで「朴人会展」と、これも春日部の命名だった。三良は水墨画と絵付けをした陶器、春日部は猫などを描いた墨画と陶盤、斎藤は6点の墨画を出品した。このユニークな試みは、残念ながら1回で終わってしまっただけで、これをきっかけに、墨の表現に大きな可能性を見出した斎藤は、以降木版画制作とともに墨画を描きつづけることになる。

同郷の大先輩 酒井三良

朴人会展に関連して、もう一人の重要な画家が、三島町出身の酒井三良。三良の日記には1953年から斎藤清の名前が出てくる。

朴人会展で斎藤が墨画を選んだのも、同郷の高名な日本画家の存在が大きかったのだろう。



斎藤清 《稲葉》 1973年 紙、墨画
やないづ町立斎藤清美術館蔵

猫も二人に共通するモチーフ。春日部は、一時期5〜6匹の猫を飼っていて、「もうそれは猫ではない何かに変容して、勝手に私に話しかける」と、晩年まで描いた。一方で、春日部に負けないくらい猫の作品を手がけている斎藤は、「オレは猫はあまり好きでネエ」。では、何で描くのかといえば、「いろんな形に変化してくれる。それがおもしろいから」。猫に向けたそれぞれのまなざしは、そのまま作品に反映されている。



春日部たすく 《猫花》
制作年不詳 紙、水彩
会津若松市教育委員会蔵



斎藤清 《猫樹》
1962年 紙、木版
やないづ町立斎藤清美術館蔵

共通するテーマ、相違するイメージ。

斎藤も春日部も異土にあって会津を想い、雪景色を描き続けた。リアリズムに根差しつつ、「究極の単純化」を追求した斎藤。「見るのではなく感ずる」ということの能力が絵画制作の主要点となることを理念とした春日部。同じ時代を生きた会津人による、多様なイメージの競演である。



斎藤清 《会津の冬(71)西松》 1987年 紙、木版
やないづ町立斎藤清美術館蔵

春日部 たすく Kasukabe Tasuku 1903-85

北会津郡高野村(現会津若松市)出身。会津中学校(現福島県立会津高等学校)を卒業後上京し、川端画学校で学ぶ。早くから槐樹社や日本水彩画会などの各団体展、帝国美術院展(帝展)に水彩画作品を出品、高い評価を得る。1940年、「次代の水彩の樹立」を目指し水彩連盟を結成すると、以降は同会を中心として制作を行うようになった。ふるさと会津の自然や猫などをモチーフに、実景と幻想が入り混じった独自のイメージを追求、日本の水彩画史の展開に大きな影響を与えた一人である。一方で、渡部菊二や角田行夫、長沢節ら上京してきた同郷の後進たちの面倒を見たり、会津美術展や福島県総合美術展覧会(県展)に参加、審査員を務めるなど、福島そして会津と深い関係を持ち続け、当地の美術文化の発展にも貢献した。

(福田もも子氏提供)

chapter.2 角田 行夫

長年の友は、会津の文化の担い手にして、水彩画家。

県展の巡回展誘致、当時としては画期的なアンデパンダン(無審査・自由出品)展(のちの会津若松市市民美術展)の提唱、オシップ・ザツキンや山下清、そして斎藤清と、国内外の著名な美術家を紹介する各種展覧会の開催…会津地域における美術文化発展の立役者、角田行夫。若き日の彼は、「みずゑのまち」会津若松市の、春日部たすく、渡部菊二の次の世代を担うことを囑望された画家だった。確かな画面構成に明るくみずみずしい色使いで描いた、東京近郊や猪苗代湖周辺の風景。「真剣に打ち込んでいたことが判る。このままにしておくのは惜しい」一自宅に保管したままだったこれらの作品を目の当たりにした斎藤清は、感嘆する。



角田行夫 《山みち》 1932年 紙、水彩 会津若松市教育委員会蔵

長年の親交が実現させた、会津での斎藤清展。

斎藤清と角田行夫の出会いは、1952年頃。会津文化協会が美術展を担当していた角田は、斎藤清展の打診のため、当時雄谷が谷にあった斎藤宅を訪れた。だが本人は留守で、妻のあいさつして帰った。その年の冬、今度は斎藤が角田宅を訪ねて来た。「その夜、色々美術談義を長時間した。角田君は(絵の事を)よく承知して話しがはずんだ」と後に斎藤は回想している。この出会いから数年後の1961年、会津地域では最初となる斎藤清展が実現する。すでに世界的な人気を博していた画家の本格的な個展。その後、67年、73年、79年と、6年おき計4回開催されることになる。二人の親交がもたらしたものだ。

《会津の冬》をはじめとする23点を会津若松市に寄贈

1979年の「斎藤清版画墨彩展」。角田が直接関わった斎藤清展としては4度目にあたる本展の開催後、23点の作品が画家本人より市に寄贈された。このうち《会津の冬(2)~(20)》は、すべてエディション番号が「1」という貴重なもの。さらに同展では墨画の大作《大徳寺》も出品され、その後市の収蔵となっている。

斎藤清、友が若き日の水彩画と出会う。

角田は、画業を断念して以来、自作を披露することはなかった。そこで長沢節ら友人たちが説得し、ついに「斎藤清さんにみてもらって、これなら発表してもよいだろうという大鼓舞をもらったら」公開しようということになった。依頼を受けて斎藤は、80点を超える角田作品と対面する。その場では何回も歓声があがったという。斎藤のお墨付きを得、ついに若き日の水彩画たちが世に出ることとなった。1994年11月1日刊行の「角田行夫回顧画集」である。発刊にあわせ作品展も予定されていたが、直前に角田が急逝し、遺作展となった。これを契機として角田作品20点が会津若松市に寄贈された。



角田行夫 《マンダリンのある静物》 1932年 紙、水彩 会津若松市教育委員会蔵

みずゑのまち 会津若松市

会津若松市という、歴史の街というイメージが先行するが、実は多くの画人、芸術家を輩出した地でもある。中でも、日本の水彩画史を語る上で本市の存在は欠かせない。優れた個性を持った画家たち—相田直彦、春日部たすく、渡部菊二、長沢節等々、彼らは全員会津若松市出身で、現在の県立会津工業高校もしくは会津高校で水彩画を学んでいる。角田行夫も、この系譜に連なる一人。画家としての活躍は短期間であったが、文化行政の立場から、みずゑのまちの伝統を守り続けたといえよう。



角田行夫 《芦ノ牧風景》 1934年 紙、水彩 会津若松市教育委員会蔵



1994年会津美術寄作展(10周年記念)(会津若松市文化センター)左から、斎藤清、角田行夫、長沢節(角田祐子氏提供)

角田 行夫 Tsunoda Yukio 1912-94

会津若松市日新町出身。会津中学校在学中の1926年、同校の卒業生によって彩光会が結成されるとこれに参加、絵を学ぶ。卒業後は上京し、春日部たすくの指導を受ける。1931年、第8回槐樹社展、第18回日本水彩画会展にそれぞれ水彩画を出品、初入選すると、以降は主に日本水彩画会展に作品を発表し続ける。明るくみずみずしい色彩で会津の自然や人物などを描き、画家としての将来を期待されたが、1935年父が急逝すると帰郷し、家業である漆器商を受け継ぐため画壇を離れた。戦後は印刷業に転向し力を注ぐ一方で、会津若松市の教育委員長や市議会議員を務め、さらに会津美術協会、会津文化協会の要職を歴任。また1989年には市内にギャラリー「うるしや」をオープン、会津ゆかりの作家たちに作品発表の場を提供するなど、生涯会津の文化・美術の振興に尽力した。

左: 角田行夫 右: 斎藤清(角田祐子氏提供)

